

実践報告

トルクメニスタンにおける日本語教育

上原 龍彦

要 旨

本稿では、トルクメニスタンにおける日本語教育の概況、及び、トルクメニスタン唯一の日本語教育機関であったトルクメニスタン国立ドゥーレットマーメットアザディ名称世界言語大学における日本語教育について、筆者の実践を交えながら紹介する。そして、トルクメニスタンにおける日本語教育の展望とその課題について述べる。

キーワード

トルクメニスタン 首相来訪 日本語教育拡大 日本語学習者の増加 教員養成

1. はじめに

筆者は2015年9月から本稿執筆時の2016年12月にかけて、トルクメニスタンという国にある大学で日本語教員として勤務する機会を得た。トルクメニスタンは日本であまりなじみのない国であり、日本語教育の状況も知られていない。したがって本稿では、トルクメニスタンにおける日本語教育について紹介する。2. ではトルクメニスタンにおける日本語教育の概況を述べる。3. では、2016年8月までトルクメニスタンで唯一の日本語教育機関であったトルクメニスタン国立ドゥーレットマーメットアザディ名称世界言語大学(以下、アザディ大学)における日本語教育について、筆者が行った実践を交えながら述べる。4. では、トルクメニスタンにおける日本語教育の展望と課題について述べる。

2. トルクメニスタンにおける日本語教育の概況

トルクメニスタンは、北はウズベキスタンとカザフスタン、東はアフガニスタン、南はイランと国境を接する中央アジアの国家である。面積は約48.8万km²、人口は約540万人、首都はアシガバット市である。1991年に旧ソ連から独立し、1995年には国連総会で永世中立国としての承認を得た。公用語はトルクメン語だが、旧ソ連圏のためロシア語も広く通じる。豊富な埋蔵量を誇る天然ガスを中心に産業を発展させ、近年経済成長を続けている国である。現在、日本とトルクメニスタンの政治的関係は強まりを見せており、グルバングリ・ベルディムハメドフ大統領は2007年の就任から現在まで日本へ3度訪問し、2013年には在日トルクメニスタン大使館が開設された。日本側からも2010年以降、要人のトルクメニスタン訪問が増えており、2015年10月には安倍晋三首相が訪問、日本の首脳によるトルクメニスタン来訪が初めて実現した¹⁾。

2007年現大統領の決定により、アザディ大学にトルクメニスタン初となる日本語学科が設置された²。毎年10名程度の学生が日本語学科に入学している³。2012年には日本語学科1期生が卒業し、2016年現在卒業生は50名程度である。日本に関心があるから、めずらしい言語を学びたいから、または日本語学科を希望する学生は少なく入学しやすいと思ったからなど、様々な動機から日本語学科に入学し、アザディ大学で5年間日本語を学習する。大学卒業後は日本大使館の現地職員やトルクメニスタン外務省、アザディ大学の日本語講師など、日本語を用いる仕事に就く卒業生もいるが、その数は少数である。他の国と同様、日本語を用いる仕事が少ないという理由ももちろんあるが、大学卒業後、男子学生は兵役、女子学生は勤労奉仕がそれぞれ2年間義務として課されるため、自身の将来設計が途中で中断してしまうという理由もある。多くの卒業生は、初等・中等教育機関の英語教員として勤労奉仕を行うため、勤労奉仕が終わった後も英語教員を継続する例が多い。このように日本語学習を続けても将来の仕事に結びつきにくいという状況がある。

3. アザディ大学における日本語教育

アザディ大学(旧名称「ロシア語・文学教育大学」、2007年に現名称に変更)は、1984年ロシア語・ロシア文学を教育する機関として設立された。その後、徐々に言語数を増やしていき、現在はロシア語や英語などを含め12の言語学科が設置されている。2016年9月現在、日本語学科の学生数は5学年で53名、教師数はトルクメン講師3名である。2012年に日本語学科1期生が卒業してからは、卒業生がアザディ大学の日本語講師として勤務している。日本語学科開設から日本人講師がトルクメン講師と協力して日本語教育を行っている。2013年には、日本の国公立大学と学術協定を締結し、毎年数名の学生が日本へ留学できるようになった。その他にも日本政府(文部科学省)奨学金留学生(日本語・日本文化研修留学生)として1年間日本の大学へ留学する制度もある²。

アザディ大学を含め、トルクメニスタンの多くの大学は2学期・5年制である。前期の授業は9月1日に始まる。11月には「日本文化の日」というイベント、及び中立記念日を祝う料理大会が開かれる。「日本文化の日」とは、大学の他言語学科の学生に日本文化を紹介するイベントである。日本語劇や日本語による詩の暗唱、日本クイズなどを行う。在留邦人をはじめ、大学内外から多くの観客が来場するため、学生たちは約1か月をかけてイベントの準備をする。特に1年生は入学して間もない中で日本語劇を発表しなければならないため大変だが、このイベントで多くの日本語を使うこととなるため、その後の日本語学習に役立っているようである。料理大会では、各言語学科がその国で有名な料理を用意し、テレビカメラを前にその料理の説明をする。その様子は、12月12日の中立記念日前後にトルクメニスタン全土に放映される。授業は12月末に終了し、1月中旬までは定期試験期間、1月下旬から2月上旬までは冬季休暇となり、地方から来ている学生は帰省する。

2月上旬から後期の授業が始まる。2月下旬にはロシアから先生を招いて、華道や茶道、墨絵などを行う日本文化体験の授業がある。トルクメニスタンで日本文化に触れる機会はほぼないので、学生たちは強い関心を持って授業に参加している。3月には、校内日本語スピーチ大会が行われる。在留邦人が質問と審査を行い、1位と2位の学生は中央アジア

弁論大会、3位の学生はモスクワ国際弁論大会に参加する権利を得られる。入賞すれば海外へ行くことができるため、何回もスピーチの推敲を重ねたり教員と発音練習を行ったりと、真剣に準備に取り組む姿が見られる。審査を担当した在留邦人からは、「学生の独自性を感じられる興味深いスピーチであった」「考えさせられる内容のスピーチだった」などという感想が聞かれ、好評を得ている。5月末に後期の授業が終了し、6月の定期試験、卒業試験、卒業式、7月の実習期間を経て、8月から1カ月間夏季休暇に入る。尚、2015年10月の安倍首相トルクメニスタン訪問時には、安倍首相夫人が来校しアザディ大学の学生と日本語で交流を行った。

日本語学科では、日本語の総合的な力を伸ばす「日本語演習」から、「語彙論」や「日本語音声学」などの日本語学系の科目、日本語教授法科目まで幅広い日本語科目が設置されている。その他にも、トルクメン語や英語、ロシア語、トルクメン文学、心理学、経済学など、すべての学科に共通する科目もある。80分授業が一日3コマ、月曜日から土曜日まで週6日授業がある。日本の大学と異なりすべての科目が必修科目であるため、授業が始まる8時30分から授業が終わる13時まで大学で授業を受けなければならない。午後と日曜日は基本的には自由時間であるが、トルクメニスタンでは国家イベントが多く開催されるため、学生たちがそのイベントに動員されることもよくある。

筆者は2015年9月から1年間、アザディ大学日本語学科の講師としてすべての学年の授業を担当した。しかしトルクメニスタン特有の日本語教育の状況に着任当初は戸惑うことも多かった。たとえば、アザディ大学の日本人講師以外の日本語話者と接触する機会がかなり限られた中で日本語教育を行わなければならない。アザディ大学を含め、トルクメニスタンの大学生は講師以外の外国人と自由に接触することができず、無許可で外国人に接触すると、最悪の場合、学生が退学になる可能性がある。そのため、講師以外の外国人が大学構内に入構し学生と接触する場合は、トルクメニスタン外務省、及び教育省からの許可が必要となる。したがって、日本人講師以外の日本語話者に対して日本語を使う機会が非常に限られる。また、授業以外で日本語や日本に関する情報に触れることが大変難しい。トルクメニスタンではインターネット環境が十分に整備されていない上、閲覧制限がかけられたり、予告なしにインターネット回線が遮断されたりするなど、接続も不安定である。また、トルクメニスタン国内で日本語教材は販売されておらず、日本から日本語教材を手に入れることも非常に困難である。したがって、学生がインターネットなどを使って日本語で交流したり、日本語学習サイトなどを活用して自身で日本語学習を進めたりするということは難しい。このように教室の外でも、さらに卒業後も日本語を使う機会がほぼないため、学生の日本語学習に対するモチベーションを維持しにくい状況にあった。そのほかにも、事前の連絡なしに学生が国家イベントに動員され、休講になることも多々あり、その都度授業計画を変更しなければならず、授業の見通しが立てにくいこともあった。

以上のような状況を打開するために、筆者は様々な実践を行った。たとえば、1年生後期「日本語演習」では、筆者以外の日本語話者と日本語でやり取りをする機会を作りたいという意図から、筆者の知り合いに協力してもらい、オンライン上で「文通」を行った。まず、1年生に手書きで書いてもらった「手紙」を筆者がワードファイルに入力し、PDFファイルに変換してから筆者の知り合いに送信した。筆者の知り合いからも同様にワード

ファイルなどで「手紙」を送信してもらい、それを1年生に配布し返事を書くという活動を行った。やり取りした「手紙」は専用のノートに保存した。この活動の中で、教科書や辞書などを何回も見返し、さらにクラスメイトや筆者と話し合いながら伝えたい日本語を見つけ「手紙」を書き上げる様子や、文法や表記はもちろん、自分が伝えたい内容と書いたものが合っているか何度も推敲する様子などが見られた。この活動で、筆者以外の日本語話者と日本語でやり取りをする経験や、伝えたい相手を意識し日本語で伝えたい内容を考えるという経験ができ、1年生の日本語力や日本語学習に対するモチベーションの向上に繋がったと思われる。また、4年生前期「翻訳・通訳」では、ただ翻訳をするのではなく、翻訳に意味を持たせたいという意図から、「アザディ大学の学生や教員に日本について紹介する」という目的を設定し、安倍首相夫人来訪時の寄贈図書『写真で知る！びっくり日本一』（株式会社パイインターナショナル発行）を用いて、様々な「日本一」を紹介する記事を作る活動を行った。4年生をいくつかのペアに分け、当該図書から各ペア一つずつ日本語のテキストを選択、トルクメン語に翻訳した上で、「日本一」を紹介する記事をトルクメン語で作成し、日本語学科の教室に掲示した。自分たちが翻訳した記事が学内の学生や教員の目に触れるため、日本語のテキストの意味を正確に理解しようとしていたり、翻訳したトルクメン語とテキストの日本語が合っているかペアを超えて検討し合ったりする様子が見られた。適切なトルクメン語かどうか確認し合う様子も見られ、トルクメン語の学習にもつながったようである。他学科の学生が記事を見ながら話していたり、他学科の教員から次の記事はいつかと質問されたりと、4年生が翻訳した記事は概ね好評であった。そのような学生や教員の様子を伝えると学生は大変嬉しそうにしており、記事作成のモチベーションに繋がったようである。その他にも3年生の授業では、トルクメニスタンではなかなか触れることができない日本文化／社会の状況を学習しながら日本語を学べるようにテキストの内容を変更したり、在トルクメニスタン日本大使館の提案・協力の下、在留邦人とアザディ大学の学生が日本語で交流するイベント「日本語実践クラブ」を実施したりした。日常生活でも将来的にも日本語を必ずしも必要としない環境で、学生にとっての日本語学習の意味を考えながら様々な実践を行うことができ、今後筆者が日本語教育に携わっていく上で大変貴重な経験となった。

4. 今後の展望と課題

2015年10月の安倍首相来訪を機に、2016年9月からアザディ大学以外の教育機関でも日本語教育が実施されることが決定した。高等教育機関では、アザディ大学を含めたアシガバット市内の6つの大学で日本語教育が開始された。中には日本の大学と協定を結び、日本から派遣された講師が日本語教育を行っている大学もある。中等教育機関では、アシガバット市内の学校4校と地方の学校8校の計12校で5年生（10歳）から日本語教育が始まった。45分授業が週2コマあり、最終学年の12年生まで順次拡大していく予定である。初等教育機関では、アシガバット市内にある140番学校で1年生（6歳）から日本語教育が行われており、こちらも最終学年である12年生まで実施される予定である。初等・中等教育機関では、日本語教育のカリキュラムを設定し、それに準拠した教科書とワーク

ブックを使用しながら日本語の授業を行っている。筆者もカリキュラム策定や教科書、ワークブック作成に関わった。さらに、アザディ大学に隣接している言語センターでも一般向け日本語講座が開講されている。以上のような日本語教育の拡大に伴い、2016年9月から国際交流基金の日本語専門家がトルクメニスタンへ派遣されることになった。

一方で、トルクメニスタンでは大統領を長とした政府機関が強い権限を持ち、様々な政策がトップダウン方式で突如として実施されることが多く、今回の日本語教育拡大も突然の決定であった。さらに、明確なビジョンや具体的な計画が示されないままでの決定であったため、日本語教育の実施に際し多くの課題が残されていることも事実である。例えば日本語教員の確保である。今後、日本語教育の拡大にあたって日本語教員の確保が必要となる。日本語教員となりうる人材は、しばらくの間アザディ大学の卒業生のみとなるが、すべての卒業生が日本語教員になるとは限らない。したがって、十分な数の日本語教員が確保できない事態が今後発生する可能性がある⁴。また、教員養成も大きな課題である。トルクメニスタン国内で日本語を主専攻とする教育機関はアザディ大学のみであり、日本語教員養成も当大学の重要な役割の一つとなるが、日本語教授法関連の科目が少なく、ノウハウも蓄積されていないので、アザディ大学において日本語教員養成を考慮したカリキュラムを構築し実施していく必要がある。また現職の教員も日本語教育を行うための十分な準備ができないまま現場に入らなければならなかったため、今後フォローが必要となる。

2016年9月からトルクメニスタンにある多くの教育機関で日本語教育が実施されることになり、日本語教育が急激に拡大した。今後も初等・中等教育機関を中心に日本語学習者数が急増していくことが予想され、それに伴い日本語教育の状況も変化していくと考えられる。解決すべき課題も多いが、日本とトルクメニスタンの関係が強まりつつある中で、日本語教育の重要性は更に増していくことだろう。トルクメニスタンにおける日本語教育が本格的に動き始めるのはこれからであり、だからこそ多くの可能性が秘められている。今後も様々な実践を試みながら日本語教育の発展に寄与していきたい。

注

- 1 以上、外務省ホームページ参照。
- 2 以上、国際交流基金ホームページ参照。
- 3 2016年9月から定員が14名に増員した。
- 4 現在も教員の確保が間に合わず、日本語の授業が開講できない教育機関が存在する。

参考文献

- 外務省ホームページ トルクメニスタン<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/turkmenistan/index.html>> (2016年12月8日)
- 国際交流基金ホームページ日本語教育国・地域別情報 トルクメニスタン<<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/turkmenistan.html>> (2016年12月8日)

(うえはら たつひこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了)